

歯を失うと食事をするのが不自由になります。これは誰もが知る事実ですが、実は歯が視力を取り戻すための鍵になることもあるのをご存じでしょうか。今回は、歯科と眼科が連携して取り組む最先端の治療法「歯根部利用人工角膜（OOKP）手術」を紹介します。

この手術は、病気や重度のやけどで角膜が機能しなくなり、通常の角膜移植では拒絶反応が起きてしまうような難症例が対象です。最大の特徴は、患者さん自身の歯を、人工レンズを固定するための台

人工角膜 歯が接着装置に

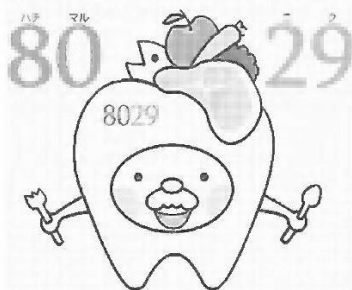
座として利用する点にあります。

では、なぜ歯を使うのでしょうか。そこには歯の驚くべき性質があります。歯の主成分である「象牙質」は血管を持たない特殊な構造をしており、人工レンズを長期間、安定して接着させるのに適しています。さらに、歯と骨をつなぐ「歯根膜」という組織が、レンズの移植後も自分の組織として目に定着する助けとなります。いわば、歯が人工物と生体を強固につなぎ留める唯一無二の「生きた接着装置」となるのです。

手術では、抜いた歯（歯根と周囲の骨）を加工してレンズを埋め込み、一度、頬の裏などに植えて自分の組織となじませてから目に移植します。

「食べる」だけでなく、将来的に「見る」ことまで支える可能性を秘めた私たちの歯。一本一本を大切に守ることとは、将来的に高度な医療を選択できる可能性を守ることでもあります。お口の健康が、全身のクオリティー・オブ・ライフ（生活の質）を支える大きな基盤であることを、改めて知っていただければ幸いです。（県歯科医師会）

健康長寿の合言葉！！



「8029運動」PRキ
ャラクター もぐじい